

東日本大震災復興支援情報



撮影地：石巻、西光寺 平成23年11月5日。ダライ・ラマ14世 被災者法要のため石巻・西光寺を訪問。

●ダライ・ラマ、石巻を訪問 薄井大還（東京都）
ダライ・ラマ14世が11月5日、東日本大震災で多くの死者、行方不明者を出した石巻門脇地区を慰霊供養のため訪れた。

西光寺周辺は、津波で町は崩壊し、全ての墓石が倒れその上に自動車が乗り上げた光景や、校舎内に流された何台もの乗用車のガソリンに引火し、学校が丸焼になった姿を見たダライ・ラマは啞然とし、こんな悲しい事は無いと話されていた。

西光寺本堂では、ダライ・ラマ法王の超低重音の読経が唱えられた。その後の多くの被災者の集まった会場での法話では、皆様と同じ目線でお話したいと玉座を降り、本堂上がり淵に立ったままでスピーチが行われ、大震災であったが、起きてしまった事に捕われる事無く、智慧で未来に立ち向かって欲しいと話された。

●女川の潜木士たち 岩尾克治（埼玉県）



3月11日の地震と津波の後、高速道路が開通、ガソリンも出回り始めたころ塩竈に入った。波打

つ高速道路、倒壊した工場、骨組みだけになったビル、土台しか残っていない家屋と想像を絶する景色を見ながら、指定された被災現場の漁港に向かった。

海上保安官の復興支援業務は、港湾の災害状況を把握、迅速に援助物資輸送のための航路を確保することと、行方不明者捜索の2点だ。女川原発に隣接する小さな港に潜水士たちが陸路現地へ入った。余震時、海底からウォーと不気味な響きがこだまして、地鳴りが直接心臓に飛び込んでくる音は気持ち悪いとプロの海保潜水士さえ口にする。それでも行方不明者の調査依頼を受ければ毎日潜る。この現実の巨大津波記録を残さなければと思って写真とビデオの映像を制作。何よりも忘れずに記憶に留める事が大切だと心から思う。



●わたしも応援するよ 村瀬正弘（東京都）



撮影地：東京都杉並区・高円寺駅南口 平成23年5月14日

3.11から2カ月経った5月14日、「がんばろう日本、東日本大震災復興支援、高円寺阿波踊り」が17連の参加で杉並区高円寺駅の南北両広場にて行われた。当日は各連が交代で駅付近各所で募金活動をし、多数の老若男女が募金をしていた。集まったお金は、杉並区と災害時相互救助協定を結んでいる、福島県南相馬市に送られた。（なお震災直後の3月20日には街頭募金のみ実施された）

毎年8月の本大会には、南相馬市の阿波踊り連も参加されている。2011年は被害後大変な事もある

り、参加が危ぶまれていたが、律儀にも出場を果され、大観衆から拍手とエールが沸き起こった。支援をしている各連の人々は子供、学生、主婦、社会人と年齢も幅広く立場も違うが、忙しいなか心を合わせ災害地の方々へ想いを馳せ、募金に協力した人々共に優しい表情が印象に残った。天災と人災が重なって、復興に時間はかかるが、有形、無形でサポート出来るよう心懸けたい。

※阿波踊りは盆踊りのひとつで、供養の意味もある。

●断念

山口一彦(東京都)



復興のシンボル、陸前高田の一本松

地震発生から2カ月ぐらいで、陸前高田の一本松を目指して現場入りした。「ルートは遠野方面より陸前高田をめざし、途中道路には“災害復旧ご苦労様です。”という手書きの看板を所々目にしてなんだか目頭が熱くなる。きっと支援車は勇気づけられると思う。遠野地方のすばらしい景色を見ながら約2時間弱であろうか。突然がーんと破壊された建物などが目に飛び込んでくる。本当に突然なのでビックリする。海より6km手前からである。目指すは陸前高田の松林のなかで1本だけ助かった松。陸前高田の復興のシンボリックになっている。現場に車で入って驚いたのは、町が無い。町全体が工事現場。所々道路封鎖でぐるぐる回ってしまい、これでは見える物も見えないので、破壊された病院の駐車場に車を止め、長靴、マスク、帽子、カメラ2台とビデオカメラを持ち、報道の腕章を付け歩くこと1時間。車ではよくわからなかったが、シンボリックな松の木を発見した。しかし立ち入り禁止と通行止めで近寄れなかったので望遠レンズでの撮影でなんとか収めることができた。現地はものすごい埃と自衛隊の車両とトラックの多さにもものすごいスピードで復興を感じた。ボランティア受付窓口も所々有り、朝の指定の時間に行けば、当日でも受け付けてもらえる。今回現場はまるで自衛隊車両ががれきの間を行き来しているので戦場みたいにも感じた」。

以上が、僕が5月20日に思ったことで、発生から10カ月近く時が過ぎ、奇跡の一本松の保護断念とのニュースで残念である。しかも復興は遅れていて、ボランティアの数も減ってきていて、だんだん風化していく懸念がある。写真家に出来ることは、風化を止めるため現場の写真を撮り続けて発表し続けなくてはならない。そして心の中の本松は絶対に枯らしてはいけない。

●心遣い

大石芳野(東京都)

福島県伊達市で高橋サツエさん(83歳)に初めて会ったのは、蒸し暑い夏の昼下がりだった。彼女は草に覆われた畑で黙々と働いていた。「急に避難になってね。去る前に草を抜いてやらないと畑も可愛そうだから。じき藪になってしまうし・・・」と穏やかさを湛えて言った。

この辺りは7月に突然、特定避難勧奨地点に指定された。地域という面ではなく点という数件ずつの避難だ。部分的に放射能の線量が高いとのことだが、地元の人たちはなかなか納得し切れない。

翌月、再訪すると畑には1本の草もない。もう避難したのかと思いながら自宅を覗くと、病身の夫と長男の3人でテーブルを囲んで休息していた。畑で撮影した写真を渡すと、疲れた顔に笑みを浮かべて「まあ、恥ずかしい。けど、嬉しいね」と

しばし眺めていた。去ろうとすると彼女は筆筒から千円札を出して折りたたみ「これを」と遠慮がちに言った。間を置いて「写真代」と言う。驚きながら私は断った。そういえば、隠岐の島でも似たようなことがあったけれど、



福島県伊達市の高橋サツエさん

いま東電の放射能汚染に苦しめられているこの地で、東京から来た者に対してまでも、何と心遣いの深い人びとなのだろうか。

「東日本大震災復興支援情報」の掲載記事を募集しています。文字450字と写真1枚を総務までお寄せ下さい。